

チェンマイ大学での貢献 (42)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報ではかなり長いつきあいになるチェンマイ大学工学部の学生の一人を紹介する。もともと筆者は滅多なことでは推薦状は書かないことにしている。特に学生の企業への就職に関しては余程のことがない限り推薦状や紹介状について筆を執らない。その理由はタイの大学生の離・転職率が就職後3ヶ月でおよそ40%、3年間で90%と著しく高い事に起因する。その要因が何かは別に記しているのでここでは省略するが、本報で紹介する学生は、心から自信を持って推薦できる能力を持ち前途有望な人材である事に太鼓判を押すことが出来る数少ない人材の一人である。知り合ったきっかけは筆者が三重大学時代に立ち上げた3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムに彼は日本、中国、タイの全てのホスト大学での開催に参加し、英語によるコミュニケーション能力も極めて高く、しかも正確な英語での読み書きが出来る能力を有している。チェンマイ大学がホスト大学をつとめる時は常にMC (Master of Ceremony)役を勤め、また国境なき技師団学生プロジェクト(Engineer Without Border)にも参加し米国の学生や教員と対等に会話出来る国際感覚も持ち合わせている。さらに指導教員の指導の下でフランスにも渡航滞在の経験がある。いつかは高く飛躍する人材の一人という観点から大いに期待していたが、予想通りに彼はタイ政府の奨学金供与試験に応募・合格し、1年前にドイツに留学すべくタイを離れた。その彼が4月下旬にタイに帰国するとの連絡があり、逢いたいと言うことで久しぶりに研究室に顔を見せた。こちらも懐かしさと成長の度合いを確かめるべく首を長くして待っていた。いつもの事ながら卒業生の研究室訪問時には30分ほどのプレゼンテーションを義務づけている。研究室の教員のみならず学生にとっても先輩の留学経験とその現状など聞きたいことは山ほどある。同じタイ人であるから第2外国語などの使用は不要である。気楽に質問し将来の来たるべき機会に備える事が出来る。30分の予定でも質問が噴出し、1時間を瞬く間に過ぎた。彼がなぜドイツに渡ってから1年のこの時期に一時帰国が出来たのかを聞いて驚いた。ドイツの大学の博士課程では所定の期間を過ぎさなくても、早く論文が仕上がれば規定の期間滞在する必要がないとのことであった。彼はドイツの大学に入学してからわずか1年であるが、既に2編の論文を書き関係学術誌に投稿したという。異例の早さで研究室の指導教員のみならず大学レベルでも驚きのようなものであるらしい。彼のように自ら決めた予定に沿って、あるいは予定より早くプログラムが進んでいる学生には一時帰国が認められるが、そうでない学生(とりわけ進行の度合いが予定より遅れている学生)には一時帰国は認められないそうである。推薦した学生が期待通りの能力を発揮し、高い評価を受けていることは推薦者としても誇りであり鼻が高い。心底「良くやっている。頑張れ」と更なる応援をしたい思いである。基本的に英語で正確に読み書きが出来るうえにフランス語、母国語であるタイ

語に加えてドイツ語のマスターも射程距離内にある事は容易に推察できる。」若さという事へのちょっとした羨望も感じられるが、彼の持つ大きなポテンシャル（潜在的可能性）に心より応援の拍手を送りたい。筆者が研究室に出入りし始めた頃に、彼は既に有限要素法を自在に利用し、研究室の後輩学生にゼミ指導が出来るほどの能力格差を有していた。彼なら「将来的にやるだろう」との強い期待は持っていたが案の定、寸分違わない精度で目標に向かって歩き始めた。頼もしい限りである。近い将来大学もしくは研究機関に戻り、研究者として、また指導者として更なる飛躍を遂げることは間違いないと保障できる。その彼が筆者に推薦状を依頼してきたことが極めて嬉しい。まさに筆者にとっては大きな名誉であり誇りである。彼の益々の発展を祈念したい。一時帰国や国際学会参加の機会を捉えて大義名分を作り、食事などで励ますのが筆者の役割であろうと心がける今日である。彼の存在が研究室全体に与えた影響も大きい。噂が噂を生み研究室の人气が上がり、これまで以上に数多くの学生が研究室に出入りするようになった。学生達もなにがしかのメリットを見いだしたのであろう。あるいは今迄のキャンパス・ライフ以上に期待できるものを研究室に見いだしたのかも知れない。

さらに筆者が最近心がけていることは、やむなきとき以外は常に研究室に常駐するべく心がけている。在職時代のかつての経験から、研究室の学生の多くは研究室に来て誰も居ないと帰るのが一般的である。誰かがいれば研究室にとどまる。十分な話し相手には英語でのコミュニケーションと言う壁があることで慣れないかも知れないが、逢う頻度が増えれば親近感も増す。研究室の学生には部屋に入って来るときには、午前ならば「おはようございます、午後ならばこんにちは、帰る時は失礼します」という日本語での挨拶を義務づけている。毎日継続して続けることが進歩を促し、興味をかき立てる。学ぶと言うモチベーションの高さと連日の継続、顔を合わせる頻度の多さが慣れを生み、自然体での対応を引き出し、恐怖を取り除き更なる興味へと進化する。筆者は講義がなくても大学には来い、掲示板の前に出向き、今日はどの学部でどの様なイベントがあるかをつぶさに調べ、興味があれば出向いて参加せよ。どうしても聞きたければ学部が異なってもお願いしてみろ。単位をくれというそれは難しいかも知れないが、聴講だけなら拒否する教員はまず居ないであろう。それでも行くところがなければ研究室に来い。部屋の空調は効き、机や椅子はある。トイレも部屋の外にはあるし食料を入れる冷蔵庫もある。何もかもが完備しているのだからこれほど整った部屋はない。アパートと同じだ。大いに利用しキャンパス・ライフを満ちたものとするべきであると檄を飛ばしている。学生数が増せば雰囲気が変わる。そういえば近々アカデミックな雰囲気がようになってきたような感じを覚えるのは筆者の勝手な気のせいであろうか。若者の”熱い気の塊”が筆者をも若返りを感じさせる。有り難い話である。写真はドイツの大学の博士課程に留学中の元研究室出身のタイの学生と期末試験中で忙しく勉強中の研究室学生、および食堂で勉強する工学部の一般学生を示す。期末試験も終わり研究室の学生も一息入れて、故郷に戻る者も居る。6、7月は夏休みである。ドイツ留学の元研究室の学生もドイツに戻ると言う。残された機会と言うことで夕食を共にする。筆者に出来る数少ない

励ましの行為の一つである。筆者が日本に一時帰国する前に研究室の長が筆者とドイツの大学での留学生を夫人同伴で夕食に招いて頂いた。大義名分は筆者に対する一時帰国のためのフェアウェル(Farewell)、ドイツ留学生に対してはウエルカムバック(Welcome back)である。この心温まる粋な行為(計らい)が大きな激励となり更なる先に向かってのチャレンジ精神を後押しする。リーダーとして備えるべき重要な心構えである。研究室長の先生は、毎日忙しく立ち回り、バンコックにも頻繁に行き来しそのタイトなスケジュールを消化しておられるが、最も重要なことは常に声を掛け可能な限りの参加機会を設けて頂いて居ることである。人を知り、話をし、ネットワークを広める貴重なきっかけとなるばかりか、長たる者が日頃何をしているかを直視出来ることは頻繁なコミュニケーションの機会を引き出し、正確な価値ある情報の共有により相互信頼を生む役割をも果たす効果につながる。今自分が何をしているかを多くの周囲に知らしめる事が懐疑心を打ち消し信頼構築に作用する。忙しくしているが「何を毎日しているのか」と周囲から見られないためにもオープン・チャンスのスタンスは指導者に必携の姿勢と言えよう。



図1 期末試験を前に勉強に精を出す研究室学生(左)と食堂で勉強する一般学生(右)



図2 研究室学生の一同(左)とドイツの大学の博士課程留学中の元研究室学生(右)